博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	髙野　敦志
論　文　題　目	文学テキストにおける視点構造

審査要旨

この論文は、文学テキストにおいて、書き手の表現がいかに読み手に伝達され理解されるのか、その全体の過程を「視点」に焦点を当て、表現と理解の構造を体系的に検証したものである。これまで発表された、同分野の学位論文や雑誌論文、書籍と比較して、狭い意味の「視点」に捉われず、広い分野にわたって、文体という観点から、視点という現象を包括的に扱った研究論文である。特に、第四章の「共感および同化」に関する章は、論点、論理的展開、また扱っている題材いずれにおいても、これまでの研究を踏まえたうえで、研究を一つ高いレベルにまで押し上げたすぐれた研究と言える。

この研究は、文体研究の側面も含むため、研究資料として主に小説のテキストを題材としているが、個々の小説や作家の文体研究にならぬよう明治から昭和の文体を網羅したコーパスを用い、幅広い様々な作家、文体、表現形式を題材とし、小説における表現と理解にどのように視点がかかわってきているか、その全体像を明らかにしている。視点と伝達の構造を明らかにする過程で、構文や統語との関連、人称とのかかわり、談話の構造等、言語学的観点から視点を検証し、語り手の役割、欧文脈・直訳対等の文体の違いによる表現効果の違いなども深く考察している。また、視点の問題を読み手の理解という干渉の立場だけでなく、書き手の表現を含めた全体的なプロセスとしてとらえ、外角的にとらえられてきた伝達プロセスを、小説の形式による違いを含めて解明することを試みている。

研究手法として、

- 小説の形式の違いが表現効果に与える影響
- 視点人物と主題化、視点人物の指標を、視点人物の同化の観点から分析
- 語り手の顔出し
- 人称の異なる小説
- 非有生名詞と視点

に関して、これまでに発表された、近・現代小説を題材として、深く掘り下げ、文学テキストの表現から理解の過程全体を、書き手の表現と読み手の理解の観点から検討している。

分析の対象とした作家及び文学作品は、主な作家だけでも芥川龍之介、遠藤周作、大岡昇平、大城立裕、梶井基次郎、倉橋由美子、太宰治、田宮虎彦、夏目漱石、三島由紀夫、三浦哲郎、村上春樹、横光利一と、明治から平成までの主要な作家の主要な作品を網羅しており、他、作家と文体に偏りがないよう、新潮社の「新潮文庫の 100 冊」、「新潮文庫　明治の文豪」、「新潮文庫　大正の文豪」、「新潮文庫の絶版 100 冊」から幅広く、分析の文章を選び、単なる文体研究にならぬよう注意を払い、一種のコーパス研究にもなっている。

また全体を通して、文体論研究としてではなく、言語学的観点からのテキスト分析を心掛けており、文体や表現を統計的に解析し、日本語で書かれた小説における文体の特徴や傾向に関しても、ある一定の指針を示している点は評価に値する。いわゆる欧文体や翻訳についても、視点の観点から深く踏み込んだ考察が行われている。欧文体において、一人称・三人称小説や語り手の顔出し、視点人物についての分析を行い、これらが一般的な日本語の文体におけるものとどう異なるのか、包括的に論じている。合わせて、いわゆる普通の日本語の文体との比較を通じて、日本語学習者にとって視点の焦点や方向などの解釈が困難な文体、また困難さの原因の特定など、日本語教育にも応用できる点にも言及している。

もう一点、この論文の学術的貢献の点で評価できるのは、視点をコミュニケーションの一部と位置づけ、各項目・論点について、コミュニケーションプロセスの中での視点の役割と役割の達成の過程のモデル化

氏名　髙野　敦志

を試みている点である。コミュニケーションのモデル化を行うことにより、言語の使い手がいかに視点を捉え、認識し、意思を伝え、受け止めているか、言語を使った認知の過程をも解明しようとしている。

このように、この学位論文は、単なる文体研究にとどまらず、表現研究、国語教育や日本語教育、また認知科学や言語哲学などの視点から、広く論じている。

審査委員全員、この論文は以下の点を修正の上、書籍または専門誌での複数の論文の形で出版する価値があると判断した。

- 視点をどうとらえるかは定義されているが、それが読み手の立場とどうかかわっているかまで踏み込めると、さらに良い論文になろう。
- 読み手にとっての「理解のし易さ」がたびたび言及されているが、「どういう理解のし易さ」なのかの定義をきちんとするべきである。
- この論文で扱っていない、推理小説、空想科学小説、歴史小説などを含めた場合、分析の結果が変わってくる可能性があるので、それについても言及しておく必要がある。
- 基本的には文体を扱っているが、文体史論的な位置づけの視点も必要である。
- 意思に関する指標は、誰の立場で描写が行われるのか、明確にするべきである。
- 中心的な論点である、作者の顔出しと語り手の顔出しの区別をより明確に定義するべきである。
- 「いる」と「ある」等、いくつかの用語は時代とともに使い方の範囲が変化してきているのはよく知られているが、視点も用語や扱う文脈によっては、再度分析が必要になるものもある可能性がある。

これら、若干修正の余地はあるが、全体として、博士の学位にふさわしい、論文であると判断された。

以上

公開審査会開催日	2014 年　6月　　4日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏　名
主任審査委員	早稲田大学国際学術院・教授	Ph.D. in Linguistics (エディンバラ大学)	近藤　眞理子
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		高梨　信博
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	学術博士(大阪大学)	森山　卓郎
審査委員	早稲田大学・名誉教授		中村　明
審査委員			